東洋史研究
第五卷 第六號
昭和十五年十月發行

# 六朝時代の史學

宮川尚志

## 一

こゝに意圖する所は、六朝時代において史學が社會・文化の中に占めてゐた地位及び役割を考察することである。そのためには六朝時代に編述された現存の史書を通じて、その時代にいかなる種類の史書が編まれ著され、いかなる史實が取り上げられ問題にされ、かついかなる觀方が下されてゐるかを檢討することにより、當時代の歷史に對する關心乃至史學思想を明かにする。かくて縱には支那史學史上に於て六朝の史學が漢代のそれといかに異り、また唐代の史學といかなる點でつながりを持つかを、また横には六朝文化の側面を史學史の上から明かにしうる。

ある時代の史學とそれを生み育んだ時代との分離しがたき關聯、相互貫通的影響の實際をいかなる點から解明すべきか。元來史學は學術の一部門として狹義の文化史の對象として考察されるが、特に支那においてそれは歷朝の政治と密接な關係を持ち、政治上歷史の價値が高く評價されるのみでなく、王朝が史官を建置して前代若く

は當代の王朝史を官撰した所謂修史事業もまた史學史の問題である。よつてこゝでは先づ修史といふ點から出發して政治と史學との關係をみると共に、かくして著された史書の形式內容を通じて史學の諸傾向を考へることにより六朝文化における史學の地位役割を明かにする。なほ修史といふ時には官命による撰述を意味する外に個人の自發的記述も含みうるから、修史を出發點として考察することは、その時代人の歷史敍述といふ文化活動を出發點とすることである。

六朝の史學にとつて最も重要な現象は大體この時代において史學が經學から獨立したといふことである。これは先づ目錄學上よりして劉歆の七略になかつた史學の名目が曹魏の荀勗の目錄では丙部に、梁の阮孝緒の七錄には第二の記傳錄として、また隋の牛弘の獻議で祕府に藏せられた四部の書の乙部において現れてゐることによつて知られる。この事情は岡崎文夫博士『支那史學思想の發達』(岩波講座東洋思潮第二冊)において既に述べられた所で、南齊の王儉の七志が猶史學を經典志に屬してゐる如き反對の事象が見られるとはいへ①、六朝時代になると史學が恰も繪畫・文學等の藝術が儒學の勸戒主義の束縛を脫した如くに儒術主義から獨立してくる傾向があるといふことは承認されねばならない。岡崎博士は更に六朝の史學について

(一)秦漢帝國滅亡以來、支那は一般に分離の傾向を辿り各種の王朝が相繼いで興亡した。その爲に王朝に關する各種の歷史が顯はれた。

(二)支那に於て文筆を重んずる傳統は、王朝の興亡と無關係に維持せらるゝ。隨つて文筆の士は其境遇によつて見聞する所を記し、之を後世に遺す。故に王朝に定まつた勢力のないことは、記錄の性質を多樣複雜ならしめる。凡そ儒術主義によつて支へられた漢朝の倒れた後は、少なくとも支配の位置に立つ一群の人々をして

最早どこまでも儒學の獨尊を主張せしめ得ない。（下略）

の二點を掲げてをられるのは、②正に當時の史學が矢張王朝の政治に何等かの點で制約せられてはゐたが、それは儒術一尊の政治思想とは稍々異るものがあり、かつ當時の貴族階級たる文筆の士は政治の覇絆をふりきつて彼等の個性の赴くまゝに多種多樣なる文化活動卽ち隋志に見える雜史・覇史・雜傳・地理記・譜系篇等の新興史書の著述に趨つたといふ事情を指摘せられたものであらう。

## 二

六朝時代の特質をなす諸傾向は後漢末以來次第に生成してきたとはいへ、それが極點に達し時代情勢の表面に現れると共に、時人にも明白に自覺されたのは晉の南渡と五胡の建國の時期を以てせねばならない。永嘉の喪亂による中原淪沒がいかに當時の漢人にとつて忘れ難い印象を與へたかは王導・周顗らの新亭對泣の逸話、劉琨の傷亂の詩篇等についても看取されよう。③この亂で西晉の時にできた陸機や束晳の史書が悉く亡んだため④、琅邪王睿は王導の獻議を容れ史官を復興することゝし、干寶をして國史を領せしめた。この時の王導の上言には

陛下聖明、中興の盛に當る。宜しく國史を建立し、帝紀を撰集すべし。上は祖宗の烈を敷き、下は佐命の勳を紀し、務めて實錄を以て後代の準となす。

とあり、矢張史學が王朝政治の規範・鑑誡として考へられ、またそれによつて復興が計られたことが判る。⑤

干寶は明帝の太寧三年（三二五）に至り晉紀を著し、その後にも王隱の晉書、孫盛の晉陽秋、徐廣の晉紀等續々晉朝の國史が編述されたが、特に注目すべき傾向が窺はれるのは、干寶の晉紀總論と漢晉春秋を著した習鑿齒の上事に見える彼の正統論とである。

干寶の總論は文選にも錄せられる名文で、當時の樣相を表明した最適の文獻である。彼は先づ晉の創業は三代の迭興と事情を殊にしたことを注意し、これは後述の習鑿齒においてもつと明瞭に表現されてゐるが、要之堯舜の禪讓の如き儒敎の政治理想は現實において裏切られ、功において表面上光輝ありとも德は劣つてゐることを暗默に承認せねばならない。しかしこれは時勢の變遷でやむを得ない事情であるが、漢人としては經學的見解は通らなくなつても何らか別の理念により彼等がその旗幟の下に參ずべき漢族王朝の權威を確かにせねばならないといふ意向を示したものと解釋できよう。

次の文は當時の風俗思潮を鮮かに展開し、時勢を慷慨してゐる。

又加ふるに朝に純德の士寡く、鄉に不二の老乏しきを以てす。風俗淫僻にして恥尙所を失す。學ぶ者は老莊を以て宗と爲して六經を黜け、談る者は虛薄を以て辯と爲して名檢を賤しむ。行身の者は放濁を以て通となして節信を狹しとし、進仕の者は苟得を以て貴と爲して居正を鄙しみ、當官の者は望空を以て高と爲して勤恪を笑ふ。……是に由りて毀譽は善惡の實に亂れ、情慝は貨欲の途に奔る。選者は人の爲に官を擇び、官者は身の爲に利を擇ぶ。しかして秉鈞當軸の士、身官を兼ぬること十を以て數ふ。……その婦女は莊櫛織紝、皆成を婢僕に取り未だ嘗て女工絲枲の業、中饋酒食の事を知らず。時に先んじて婚し、情に任せて動く。故に皆淫逸の過を恥ぢず、妬忌の惡に拘らず、舅姑に逆ふあり、剛柔を反易するあり、妾媵を殺戮するあり、上下を黷亂するあるも、父兄これを罪せず、天下これを非とする莫し。(下略)

この續きに、かゝる風俗の頹潰はその由つて來る所のもの漸にして、一婦人たる賈后の肆虐によるものにあらず、また惠帝の暗愚もこの形勢を助長したのにすぎないといふ口吻を洩らしてゐるのは、干寶が政治の得失王朝

の興廢を見るのに、經學的な三代の興亡史論たる湯武・伊周が國を興し、桀紂妹妲がこれを亡したといふが如き觀方を取らず、個人の行爲の道德の如何ではなく、一般人の政治的社會的惡德が時勢を一變するに至つては、(上の引例には略したが)劉頌・傅玄・郭欽ら卓識の士の正しい意見もこれを防ぎとめることができなかつたといふ魏晉社會衰亡の史論を述べてゐるのである。

かくて晉室中興の指導原理はどこに見出すべきか。これに關して習鑿齒(一三八四)の意見を見よう。彼の著、漢晉春秋四十七卷は後漢の光武帝より起り西晉の愍帝迄の史實を記してゐるが、三國時代において蜀を以て正統とし、魏を簒逆となし、司馬昭が蜀を亡したのを以て漢甫めて亡んだとなし、要之、晉は漢を承けたので魏の禪を受けたのではないと主張するのである。彼は長く桓溫に仕へ、晚年朝廷の史官に任命される筈であつたが會々病歿した。臨終に上疏して、その持論を上聞せんとした。彼は「代王の德あるを以てせばその道足らず、靜亂の功においては孫劉の鼎立を許してゐたから魏はかつて一日も王ではなかつた。これに反し晉の三祖の功業は赫々たるものあり、宇宙を混一し軌を二漢に同じうする概がある。晉を以て直ちに漢を繼ぐのは、恰も漢が周を繼いで秦を繼がないのと同じく、不正の魏を尊ばざるは大通の道を虧かざらんが爲である」と考へた。

漢族の最初に被つた災厄といふべきは北支が夷狄王朝の支配に歸したといふことで、たとへ版圖は東南の一隅に限られ中原を逐はれたとはいへ漢族王朝が當然あくまで正統の唯一の王朝である。卽ち夷狄の王朝を僭僞なりと斥ける東晉人の當面の主張と、かつこの主張を過去の歷史に向けて、漢族の天下が分裂することは考へ得られず、必ずやその內の一が正統でなければならぬ。數世紀に亘つてめざましい治績をあげ中原統治の成果をあげえたのみならず、匈奴・氐・羌・鮮卑の夷狄をして久しき間終に一歩も中原を保たしめなかつた漢朝——その內に

は理念において兩漢を紹いだ蜀漢も含めらるべきであり、この漢朝を晉が直ちに繼ぐことこそ漢族王朝の名分を立てることができるとし、儒學尊重の觀念は依然として晉人の腦裏を支配し、たゞ往時と異り今や異民族の勃興を眼前に見てはその儒學の學問としての面よりも民族主義思想の面が強く意識される。東晉初において應詹が儒學振興を主張し朝廷でもこれを容れ、概して東晉を通じて、一般貴族の老莊佛教的傾向に對し朝廷の實權を左右する若干の官僚は政治指導の原理ことに對外的政策の根據として儒學を執つてゐたこと、[6]卽ち學術としては後漢代におけるが如く文化の中心を占めることは出來なくなつたが政治・民族の現實的勢力の根源卽ち民族主義精神として儒教が保持されてゐる。一般に戰亂時代であり、王朝が屢々更迭しその實力强大でないにも拘らず、修史が頻繁に行はれ、政治史學に關する著述が史學界の主流を占めてゐた事情もこゝに基因するのであるが、それにも關せず、現實の國力が夷狄を中原より驅逐する能はず、思想においても儒學が道佛に敵し得ず、朝廷中心の儒學復興運動が企てられてはゐても、それが時代の根柢にふれたものではなかつたといふ事情も亦これに關聯してゐる。[7]しからば夷狄王朝における史學はいかなる地位にあつたかを對照して考へるべく五胡諸國について述べよう。

## 三

五胡の君主が皆中原の文物を尊重し太學を建て學官を置いた等の事蹟に竝行して漢人をして國史を修せしめたことは著しい。後趙では太興二年(三一九)祭酒任播・崔濬を史學となし、又記室佐明楷・程機をして上黨國記を中大夫傅彪・賈蒲・江軌をして大將軍起居注を、參軍石秦・石固・石謙　孔隆をして大單于志を撰せしめたが、これはいかに彼等夷狄君主が自己の創業立國の迹を明かにし、漢族國家に比し遜色なきことを主張せんとしたか

ゞ分る。しかしこれら撰述に當れるは勿論教養ある漢人士大夫であり、彼等は勢に迫られ夷狄の朝廷に出仕すと雖も、內心夷狄の文化を卑しみ彼等傳統の文化を誇る心理にあつたこと推察に難くない。さればこゝに若干の葛藤が生じるのは避けがたい所である。卽ち前漢の劉聰の時に公師彧を左國史となし高祖本紀及び功臣傳二十人を撰せしめ甚だ良史の體を得たと稱せられるのであるが、會々凌修といふ者、その先帝を訕謗したと譖したるため劉聰怒つてこれを誅した。こゝに至り和苞が改めて漢趙記十篇を撰し現に斷片が傳つてゐる。

前秦では趙淵・車敬・梁熙・韋譚ら史官の任にあり著述あひ繼いだが、これらの史書中に會々苻堅の母苟太后が寡婦になり將軍李威を內寵したる事實を記してゐたが、建元十七年(三八一)に至り苻堅これを發見し甚だ慚づると共に怒り、史書を焚き大いに史官を檢察し罪を加へんとしたが、趙淵・車敬ら已に世になく乃ち止めたといふ。

かゝる事情で五胡諸國にあつては史實の正確は君主の威怒に制せられて容易に期せられなかつた。五胡が部族生活から國家建設に迄至る間の事情がかくて早くから失はれたことはわれわれに取つても遺憾であるが、凌修の例に見るごとく漢人官僚の間のみにくい軋轢、特に史官が尊ばれてゐた⑧爲に自然と嫉視・誣言等の情弊が兆してゐたことを思へば、五胡君主の無理解と共に漢族官僚の不德をも咎めなければならぬ。後燕の慕容垂の命により本紀及び佐命功臣王公列傳三十卷を撰した董統の史書は敍事富贍で一家の言と爲すに足るといはれたが、褒述過美にして董史の直に慚づと稱せられ、又前秦の著作郎董誼が焚かれし史書の舊語を追錄したが十に一も存しなかつたと傳へられるのを見る時、五胡治下における史學が辿らねばならなかつた道程を知るべきである。

甚しきは北魏の太武帝が宿敵赫連勃勃を亡し、その史官趙逸・張淵の修めた夏の國史を讀み、勃勃を讚へてゐ

る條に憤怒し彼等に罪を加へんとした時、崔浩が

文士の褒貶は多くその實を過ぐ。彼の謬述は亦猶子雲の新を美めしがごとし。皇王の道固より宜しくこれを容るべし。

と取りなした如き、史家の亂國に處する、また艱きものがあつたことを感ずると共に、漢人史家が權力者に媚び勢威を憚り毀譽の曲筆をなすことは何も夷狄の治下に始まらず、從來からの弊竇であることを推知しうる。ともかく事政治に關する限り當代の史書は到底正鴻を期し得られなかつたことを知るならばわれ〳〵の史料批判の一助にもなる。さうして修史についてみても漢人の舊弊は文化低き五胡がこれを矯正しえざるのみかこの風を助長したのであり、彼等が漸く漢文化を攝取しそれを自覺に致すに及んだ段階に於てのみ、董狐の史風を理解し史學にとつて眞實が唯一の價値であることを認識することが期待できる樣な情態を見るに至つた。この段階は五胡時代を過ぎて北魏の江北統一の時期において一たび微かに光を放つた。

北魏太武帝の朝に在つて漢官進出の中心勢力をなした崔浩は北魏の國事を書するに隱惡することなく、その朋黨の漢官ら彼に勸めて國書を石に銘し直筆を彰はさんと請ふに至り、この計畫には拓跋族中第一の漢文化愛好者たる太子晃も贊成した。この結果拓跋部人の憤激甚しく遂に浩を帝に構へ、これが契機となり崔氏一門及びその姻親の五族誅滅の大事件が起り、遂に漢人豪族が北魏君權の下に懾伏する事態に至つた。この時、崔浩の親友で國書に筆を下すこと多かつた高允が修史の實情を太武帝に直言し、禍難身に及ぶを恐れず、太子晃また彼がその師傅なるにより極力庇護しその命を救うたことがあつた。太武帝は高允の直情に感じ

直なる哉。これ亦人情の難しとする所、しかも能く死に臨んで移らず、亦難からずや。かつ君に對ふるに實

を以てするは貞臣なり。此の言の如くんば寧ろ一有罪を失ふとも宜しくこれを宥すべし。

と言ひ彼を誅しなかつた。卽ち知る、漢末以來の學問の派閥的傾向による學界の墮落に伴ふ史家の德操の保たれ難い傾向は、未開不文なる五胡の矯正しうべき限りではないが、しかし空前の時變に遭遇しこの危局を乘り切つた漢人の反省決意に基いてのみ文化の甦生を促がすべき科學的精神が維持され發揮された。崔浩の誅滅は國史の問題が唯一には非るべく、高允の言に見る如き彼の不德もあつたらうが、この問題に關する限り拓跋族の精神には漢化の程度進むにつれ文化に對する理解・寬容の傾向が生じ、それが甦生せる漢文化の主體的環境となり、こゝ少時の間極めて健全なる新文化が創造されつゝある樣を看取しうるものではなからうか。

太子晃はかねて太武帝に謁する時にいかに振舞ふべきかを高允に指敎したに拘らず、彼が直言して緊迫した瞬間を演出したことを遺憾とし、後に彼を責めたが、この時の高允の言は眞に太子をして動容稱嘆せしむるものありしと共に、われわれも彼に於て支那史學のすぐれた面——實用主義の段階とはいへ、その段階における眞理感覺の健全なる例を見るのである。

それ史籍は帝王の實錄、將來の烱誡なり。今の往を觀る所以は後の今を知る所以。是を以て言行擧動、備載せざるなし。故に人君愼しむ。……浩、蓬蒿の才を以て棟梁の重きを荷ひ、朝に在つては騫諤の節なく退いては委蛇の稱なし。私欲その公廉を沒し、愛憎その直理を蔽ふ。これ浩の責なり。朝廷起居の跡を書し、國家得失の事を言ふに至りてはこれ亦史を爲むるの大體、未だ多く違ふとなさず。然して臣浩と實にその事を同じうす。死生榮辱、獨殊なし。誠に殿下大造の慈を荷ふ。心に違ひ苟免するは臣の意に非ず。

崔浩の誅後廢せられてゐた史官は文成帝の和平元年(四六〇)六月復興せられ、爾後北魏史學の發達を見たが、

こゝでは詳說しない。

## 四

六朝時代に撰成された各朝國史については唐の劉知幾「史通」正史篇に詳しく記されてあるから、具體的な事實はこゝに加へない。たゞ十八家晉史の語に見るごとく、前後あひうけて王朝の歷史が編纂されたことは、この時代に修史が大層名譽なことであり、官途における榮達の途であつたことが考へられる。

何法盛の晉中興書は體例・內容において他の諸史と立ちまさつて良史と稱すべきであるが、南史徐廣傳によれば、實は郄紹がこの書を作り何法盛に示した所、法盛は

卿は名位貴達なればまた此の延譽を俟たじ。我は寒士にして聞ゆるなければ宜しく以て惠となすべし。

と申し込んだが、紹は與へず、齋內にしまつてゐた。その後、法盛は彼の不在中入つてゆき唯一の稿本たる郄紹の中興書を竊み自分の名で刊行し世に行はれたといふ。眞僞未だにはかに斷ぜられないが、史書を著述することが、貴族社會に名聲を馳せる所以であつたことは諒解できよう。

裴子野の宋略二十卷は敍事評論多く善しと稱せられたが、當時既に行はれてゐた宋書の著者沈約はこれを見て「吾逮ばず」と歎述した。宋略の中に「淮南太守沈璞を戮す」といふ記載があり、璞は卽ち約の父であるが、義師に從はざりし爲にかく直書したのである。沈約は懼れて徒跣しこれに謝して兩つながら釋さんことを請うたといはれる。

齊の王智深は武帝の命をうけ宋紀を撰せんとするや、芙蓉堂に召見し衣服を賜ひ宅を給したが、彼は元來貧しく衣なき有樣であつたのでその事情を豫章王嶷に告げた所、好學を以て知られた王は

卿の書成るを須ち當にあひ論ずるに祿を以てすべし。

と答へた。

以上の三例は何れも修史が名譽ある事業であつたことを物語つてゐる。

南朝の歴史を讀んで氣持の惡いことは當時の帝王の私生活上の悖德暴虐の有樣が露骨に描寫されてゐることである。しかも宋の孝武帝や廢帝子業の如き例を見ても、此等君主は政績見るべきもの必ずしも無しとしない。その不德の行爲は專ら宮廷內に限られ、從つて家門道德を重んずる健全な貴族の眼から見れば響蹬すべきことであつたらうが、天下の治道より見れば彼等は豪族の專橫を抑へ帝室の威權を張らんと務める有能の君主であり、實に彼等が史籍にその悖德を痛論せられてゐるのは貴族が彼等に對する反感の一つの現れとも見られなくはない。⑨

梁の武帝の時、吳均が齊書を撰せんとして帝に齊起居注群臣行狀を借覽せんと請うた時、武帝は

齊氏故事、布いて流俗にあり、聞見既に多し。自ら搜訪すべし。

と拒否したので、彼は遂に齊春秋を私撰した。その中に梁の武帝が齊の明帝の佐命なりと記した箇所があつた爲帝の忌諱にふれ書は焚かれ職は免ぜられたといふから、武帝が祕府の書を提示しなかつたのは南朝革命の際における忌諱すべき政治上の實錄を隱さんとしたものであらう。南朝の史書にこの種類の曲庇あるのは明白な事實で既に三國志の著者陳壽と雖も免れなかつた。淸の趙翼「二十二史劄記」卷九「宋書多徐爰舊本」の項下に、

余さきに疑ふ、約の宋書を修むるや、凡そ宋齊革易の際は宜しく齊のために諱むべし。晉宋革易の際は必ずしも宋のために諱まじ。乃ち宋のために諱むもの、反つて齊のために諱むより甚し。然る後知る、宋のために諱むものは徐爰の舊本なり。齊のために諱むものは沈の補輯する所なり。

と論じてゐる例を見ても知られる。また沈約は南齊の時に宋書を撰したが多く孝武・明帝の諸々の鄙瀆のことを載せてあるので、齊の武帝は左右をして約に告げしめて曰く

孝武の事迹、頓に爾る容からず。我昔かつて宋の明帝に事へたり。卿、諱惡の義を思ふべし。

と傳へたので、沈約つひに文中につき省除する所多かつたといはれる。南朝に革命が頻繁に行はれたことと、帝王の私生活に對する貴族の忌憚なき批難とが相互に作用して南朝の史書には、北朝において漢人史家が胡族に對する反感に基く事實の露惡とこれを制壓する夷狄君主の專制との抗爭のために史實の失誤を來したといふ事情に對照して、やはりここにも史實の適正ならざる憾があるといふことが推知できる。

要之六朝の史學は貴族の史學である。帝室において修史を帝王の大業の一として尊重し、撰集の勅命を屢々下し修史は立身の手段でさへあつた如き事情においてさへ、なほ史學の存立は貴族の手中にあり、貴族の關心する所が多く史書に反映してゐる。卽ち家門の名譽と榮貴とを宣傳し誇示するために譜學・家傳の類が多く作られ、また家門の血統の一つ一つの環である個人の性行に關する記述として傳記・逸話集(世說新語の如き)の類が編述される等の點を指すのである。北齊の魏收の魏書が穢史と稱せられたのは彼が性頗念で自己の憎惡する家族に對しては被らすに醜言を以てしその善事を沒し、自己の親しみ賴む所ある者には佳傳を立て、その結果當然傳せらるべき人が立傳に洩れたり不實な記載を蒙つたりしたため、その一族子弟が憤慨して問題を起したからである。いかに當時の貴族が正史に傳記せられることを重要事とみなし、身後の名聲を留めることに專念したるか、彼等の心理を理解すべきである。魏收が魏書を撰せんとするや、北齊の文宣帝は彼に敕して

好く直筆せよ。我つひに魏の太武が史官を誅したるを作さず。

といつたが、帝の言の如くんば北朝の後期になると史家の直筆の難きは君王の顰笑にはあらず、貴勢なる門閥間の離合集散の葛藤であつたことが判る。⑩

されば六朝において正史は王朝の政治方針の線にそうて撰述せられたとはいへ、實は貴族の好尚が多分に反映してをり、帝紀を敍するにも帝王を一箇大貴族の家の子として傳へんとする樣子がある。個人及び家門の美名を稱述せんには浮華溢美の表現が必要とされ、史學は正確を尙ぶことよりも表面の記載の美麗を尙ぶ方向へ引き寄せられ、簡言すれば史家は文筆の士であり、史學は文藝であつた。さうして國家の制度典章の研究も行はれたとはいへ、これまた形式を重んじ社會政治の實情を反映しない。現今殘る正史について見ても志類を有するは魏書・宋書・南齊書にすぎず、それにも禮樂・天文・祥瑞のごときわれらの感じ方からみて實際的でない部分が多い。

南齊の建元二年、檀超　江淹史職にあり、上表して條例を立てんとし、これに關して朝議沸騰した。時に祕書丞袁彖議して「處士は皇王を排斥する偏介の行にして長風移俗すべからず、遷固の錄せざる所、一介の善頓に略するに緣るなくんば宜しくその姓業を列し他篇に附出すべし」といひ、處士傳を立てることに反對し、また佐命の功臣王儉は朝會志を省き食貨志を立つべきを主張して

金粟の重、八政の先にする所、食貨通ずれば則ち國富み民實る。宜しく編錄を加へ以て務本を崇ばん。

と論じ、かつ帝女傳を立てんとしたるのにも反對し、高德異行あらば當に列女に載すべく常美に止まれば舊來のごとく書せずして可なりと奏した如き、當時としては指導的な意見といふべきである。⑪國家の制度に關せるごとき方面は當時貴族の關心の中心にはなかつたことが考へられ、王儉が當時の文藝化した史學を快しとせず、その七志において史記等を經典志に編入したるは反つて彼が國家・政治の歷史を本義と考へた識見に基くものかもし

れず、必ずしも史學の經學から分離する傾向に反對したものではなからうかと思はれる。

## 五

以上において政治との關聯において史學を考へたが、その結果として史學が反つて貴族文化の一部門としてその好尚・關心に左右される面が多かつたことが判つたので更に當時の史書の形式・內容を通じて文化との關聯において史學の地位を考へて見よう。それについて當代の史家の史料學的見地に關して一言しようと思ふ。

後漢中期以後儒學一尊の傾向が崩壞してくるにつれ、儒教的見地から價値ありと信じ重んぜられてゐた史料以外に巷間の雜說、百家の遺言などにも史家の注意がむけられる。儒家の學說の中にも純正經學以外の要素が著しく混入してくる。神仙譚や緯書の中に傳へられる記事も雅正なる定說と肩を比べる樣になる。今一つはいふ迄もなく異民族の內地雜居、漢民族流徙による新開地の事情が明かにされると共に、同じ中國の中でも地方差が注意されてきたこと、更に佛教の流入を中心とする西域・南海方面の新知識の吸收、知識人たる逸民が山林に生命を全うせんとして、都心を離れた素朴な民俗・傳說の境に身を置くことによる新奇・神怪なる經驗等、これらの原因により記述される事項が多樣性をおびる。第三には經學的に規制された人倫の體統が崩壞して個人の生活が自らの生活を規範づけんとして、しかも全然設定された規範に封じきられないため起る人間生活の流動的・豐富になることによる個性に對する注意、換言すれば個人の風尙行爲に對して種々な角度から評價が與へられること、これらの事情に基いて六朝史家の史料に對する態度は異聞を搜集し從前の範圍以上に出でんとし、史實の形式的整齊や一定の規格を守らず、正確にして現實的なることよりも博採にして想像的な史料を追求する傾向にある。しかし前者を全然おしのけて代らうとするのではなく、これをそのまゝ高閣に束ねおき、力の及ぶ範圍で新知識

を開拓する。

干寶は晉紀の他に搜神記の著で名高いが、彼は自分の家に起つた奇怪な事件に感動して古今の神祇靈異、人物變化を撰集してこの書を作つたのである。彼は異同を博採し遂に虛實を混じたとあるが、その序において

先志を載籍に考へ、遺逸を當時に收むるは、蓋し一耳一目の新しく聞覩する所に非ず。亦安ぞ敢て失實のものなしと謂はんや。……況んや千載の前を仰述し、殊俗の表を記す。片言を殘缺に綴り行事を故老に訪ふ。將に事をして迹を二にせず、言に異塗なく然る後信と爲さんとす。固より亦前史の病ふる所、然りしかうして國家注記の官を廢せず、學士誦覽の業を絕たず、豈その失ふ所のもの小にして存する所のもの大なるを以てせざらんや。今の集むる所、設前載に承くるある者は則ち余の罪にあらざる也。もし近世の事を採訪し苟くも虛錯あらしめば、願くは先賢前儒とその譏謗を分たん。云々

と斷つてゐるが⑫、搜神記の內容がわれわれから見ていかに荒誕で現在の史學において餘り評價利用されないといつて彼の資料蒐集選擇の用意を輕視してはならない。要之古典に傳ふる事實はそれを沿襲し尊重するが、その他に近世の事件を自らの意欲において訪求する自由を古典的精神から束縛されるのを欲しないのである。この結果は民俗的知識の採集が盛んになるを來した。史通採撰篇に於て

安國(孫盛字)の陽秋を述ぶるや、梁益の舊事はこれを故老に訪ふ。それ芻蕘の鄙說を以て刊して竹帛の正言となして輒ち五經と駕を方べ、三志と競爽せんと欲す。斯ち亦難し。

と述べてゐる。彼は桓溫に仕へその征西に從ひ巴蜀をも訪れた如くであるが、その晉陽秋は孔子の春秋にならひ鑑誡を將來に明かにせんとし詞直にして理正と稱せられた。たゞその材料を民間に採つたといふのは例へば諸葛

亮の卒する時星がその營に落ちたと說くごときであらう。これはひとり孫盛に止まらず、王隱・何法盛も專ら州閭の細事、委巷の瑣言を訪うたと云はれ、[13] 習鑿齒の漢晉春秋にも孫盛と同じく梁益の舊事にしてこれを父老に尋ねたものがある。それはやはり諸葛亮の陣歿について

死せる諸葛、生ける仲達を走らす。

との百姓の諺あることを聞知しこれを採錄したことであつて、從來西晉の頃できた史書は何れも司馬氏を憚り、仲達と孔明との戰鬪について故意に仲達の優勢を傳へた。

陸機の晉史、虛しく拒葛の鋒を張る。

と史通にいふ如く、現在二十四史中の晉書の宣帝紀を見てもその沿襲の蹤跡を感ずる。しかるに習氏の採訪がこの語を得るや事の眞相は始めて明かになり、蜀軍の銳鋒は魏にとつて侮るべからざるものあり、民心また蜀漢に靡いてゐたことが暴露された。劉知幾が「歷代の厚誣、一朝にして始めて雪ぐ」と稱した所以で、[14] この時恰も桓溫北伐して東晉人の意氣天を衝くものあつた。桓溫つとに孔明を慕ひ自ら比してゐたが、この諺を聞いては快哉を叫んだことであらう。

とにかく故老の言を採用することはこの時代の史學の進歩した點であつて、かくてこそ現在この時代の文獻が支那の民俗信仰研究の寶庫となつてゐるのである。實に劉知幾もその曲筆篇では、「昔秦人死せず、苻生の厚誣を驗し、蜀老猶存し、葛亮の多枉を知る」といつてゐるので、かゝる新史料が多く紹介されればこれによつて從來の史料の範圍で書かれた歷史に對し批判的態度に出られることも考へられる。劉知幾に「疑古」「惑經」の二篇あり、前者において帝堯の禪讓を疑ひ

案ずるに汲冢瑣語に云ふ、舜、堯を平陽に放つと。しかして書に云ふ、某地に城あり、囚堯を以て號となす。識者、この異說に憑りて頗る禪授を以て疑となす。

と述べてゐる論據にも間接ではあるが結局民間資料を利用し經說を信用しない態度が現れてゐるのであつて、この點から見て六朝史學は漢から唐への橋梁たる地位に立つのである。

裴松之の三國志補注は宋の文帝がこれを見て「此れ不朽と謂ふべし」と嘆じた如く、陳壽の書が略に過ぎるのを惜み、壽の載せざる事にして宜しく存錄すべきものは畢く取り、その闕を補ひ、或は同じく一事を說いても辭に乖雜あり、或は出事本異り疑判つ能はざるものは並びに皆抄內して異聞に備へ、もし紕繆顯然、言の理に附せざるあれば違に隨つて矯正し以てその妄をこらし、その時事の當否、及び陳壽の小失は自らの意を以て論辯したといふ。要之、事實の增加に留らず、評語を交へてゐるのは注意すべきで、そこには批判的精神を含んでゐる。しかし元來人物批評が樣々に派れてくるのを、確かな史料により疑はしい知識を斥け、自己の意見で論斷するのであり、例へば『魏書』に「孔明糧盡き勢窮り憂慮して嘔血し、一夕營を燒き遁走し谷道に入り發病して卒す」とあるのを蜀側の史料により否定した末に

それ孔明の略を以てあに仲達のために血を嘔かんや。

と云つてゐる等、史料批判を人物論の手段にした觀があるのは魏晋以來名族の淸談の餘音をもつからであらう。

以上史料の取扱ひに現れる新傾向はこの時代の史書の形式が多樣になつたこと、更にその中にもられる史學思潮の時代傾向と照應して、全體として六朝史學を特色づけてゐるのである。

## 六

六朝時代の史書編纂の一覽をするのに適當なる隋書經籍史には史部の書を分ち、

正史　古史・雜史・霸史・起居注[15]・舊事篇・職官篇・儀注篇・刑法篇・雜傳・地理記・譜系篇・簿錄

の十三とし、この中雜傳・地理記・譜系篇等は六朝の社會情勢に伴つて盛んになつた史書の形式で特にわれわれの注意をひくものである。また劉知幾が史通雜述篇で古今史流の派別を分類して論述してゐるのは大いに參考とするに足るものである。彼によれば上代は帝王の書(三墳五典)中古は諸侯の記行(春秋檮杌)が主要なもので、この外に外傳として本草・山海經・世本・家語あり、これらは夙に自ら一家を成し能く正史と並行した。近古に及び(漢以後を指す)此等の偏記小說の道漸く派れその流十あるに至つたといふ。その要旨を摘記すれば(△印は漢代の撰)

一、偏紀(偏記)　△陸賈「楚漢春秋」　樂資「山陽公載記」　王韶之「晉安帝紀」　姚最「梁昭後略」

この類は卽日當時の事を記した短篇の近世史で最も實錄となすに足る國史であるが、その言多く鄙朴で全體がまとまつてゐないので後世史家の削藁の資となるにすぎぬうらみがある。

二、小錄　戴逵「竹林七賢論」　王粲「漢末英雄記」　梁元帝(蕭繹字世誠)「懷舊志」　盧思道(字子行)「知己傳」

天下の人物の行事につき知る所を特に擧げ短篇としたもの、私的の交友錄である。その長短所は偏紀に同じい。

三、逸事　和嶠「汲冢紀年」　葛洪「西京雜記」　顧協「瓊語、謝綽「拾遺」

國史の記事記言の遺逸を好奇の士が補つたもの、異說を博める點で益があるが、妄りに傳聞をのせ銓擇なく眞僞是非を區別しえざるに至る。(郭憲の洞冥記、王嘉の拾遺記の如し)

四、瑣言(小說)　劉義慶「世說」　裴啓(字榮期)「語林」　孔思尙「語錄」　陽玠松「談藪」

街談巷議時に觀るべきものあり、小說巵言なほ已に賢なるものを錄したもので當時の辨對、流俗の嘲謔をのせ話題にはなるが、その弊や褻狎の鄙言で風規に益なく名教を傷けるものがある。

五、郡書（耆舊傳）　△圈稱「陳留耆舊傳」　周斐「汝南先賢傳」　陳壽「益都耆舊傳」　虞預「會稽典錄」　常璩「華陽國志」　劉昞「燉煌實錄」「涼書」

郡國著名の人物の事蹟を鄉土史家が記したもので鄉土意識によりその鄉賢を譽めてゐるが、その評判はどこでも通用するといふわけではない。常璩・劉昞の著の如く該博詳審なるもの以外には特に取り立てゝ云ふ程のものは少い。

六、家史　△揚雄「家譜」　殷敬「世傳」　孫氏「譜記」　陸景獻「陸氏宗譜」

高門華胄が父祖の遺烈を顯彰し後代に傳へんとするもの。家本位であるから子孫が沒落すればその書の價値も喪はれるわけだ。

七、別傳　△劉向「列女傳」　△梁鴻「逸民傳」　趙采「忠臣傳」　徐廣「孝子傳」

賢士貞女等の百行善に歸すべきものを錄するが、文章の思想も構造も新規なところなく徒らに前史を博採して新說を附加するやうなものは少い。

八、雜記　祖台之「志怪」　干寶「搜神記」　劉義慶「幽明錄」　劉敬叔「異苑」

天地間怪異なる經驗を尋ね、神仙の養性を說き禍福の鑑誡を垂れるが、その謬れるものはたゞ妖邪につとめその義取るべきものがない。

九、地里書　盛弘之「荊州記」　常璩「華陽國志」（再出）辛氏「三秦記」　羅含「湘中記」

九州土宇・萬國山川・物産殊宜・風化異俗を記したもので、朱贛や闞駰(十州記)の書の如きは天下全體に亘つて述べてゐるが、普通地方毎に限るからそこに住む人が各々「住めば都」といふ意識から實情以上に善く書く。又地名の來歴や舊跡の說明には如何と思はれるものがある。

十、都邑簿　潘岳「關中記」　陸機「洛陽記」　「三輔黃圖」　「建康宮殿」

帝王の都の規制を記し、宮闕・陵廟　街廛・郭邑に及ぶ。愚者がこれを作れば煩にして且つ濫、博にして限なく草木の數まで調べる樣なことになる。

劉知幾はこの外にも淮南子・抱朴子の類も敍事の點からいふと史の雜といふべきだが思想として子部に屬するからこゝに列しないといつてゐるが、彼の意や史學の正宗は王朝の一貫した全史である正史・編年であり、これら雜述はその不備を補ふ點についてのみ價値を有するので、それ自體としては史學の軌道を外れる傾きがあり、又實際上學問風敎に益なきものも多いといふのである。

## 七

さて六朝の正史は概して避諱・文飾多く全體としての價値は前代の史漢に及ぶもの少いと評價してよからう。[16]しかも當時の雜述は確かに史學の新傾向を示したもので、その價値いかんを考へる先に、そこに如何なる時代思潮があらはれてゐるかを檢べてみよう。

第一に超俗的な個人に對する關心が著しく高まつてゐることである。正史の列傳は普通に朝廷佐命の功臣の事蹟を輯錄してゐるもので、政治と關係ある面において重視されるのであるから、特に個人の性行に注意を向けたとは云はれない。換言すれば名を竹帛に垂れることを願望とし、またそれに値ひしたと認められた人達を傳記す

るのである。しかるに周知の如く、范曄が後漢書を撰するや、普通の功臣傳の他に、社會的に類型をなした數群の人々を夫々彙類となして、循吏・酷吏・宦者・儒林・文苑・獨行・方術・逸民・列女の各傳となしたことである。人物事蹟の似通うた人達を一卷の中に編する方針は史記・漢書の目次を見ても伺はれるが、范曄の如く意識的に彙類し、一般列傳と區別し、ことに傳する始めにその類の特性につき云々する所あるのは確かに新しい傾向を思はせる。その中でも獨行・方術・逸民の三者の如き、天下の治道と關するなく、彼等の思想においても帝王の政治圈外に立つのを理想とし、所謂「王侯に事へず、其の事を高尚にす」といふ如き趣きある。しかも正史の上に彼等の行ひがほめ傳へられてゐるのは、かゝる政治からの離脱、俗情の超脱が反つて當時の社會から高く評價されたことを示す。彼等の中には野王二老とか、漢濱老夫とか、名も知られぬ人が傳せられ、計子勳とか上成公とか事迹不分明な人が列せられてゐる。魏晋以來、正史以外にも嵇康の高士傳とか陶潛の群輔錄とか、人物を主題とする著書が數多く作られてゐるが、その極は神仙傳の類に迄發展するので、こゝに至つては最早實在の人物たるか否かの別も重視せられない。史傳は歷史ではなく歷史の體裁によつた空想上の人物に關する物語りになつて了ふ。支那の民間說話があたかも實際史上の人物の經驗たるかの如く記載され、無稽荒唐の話も一々年月・場所が明示されてゐるといふ如き事情と考へあはせ、こゝに六朝史學が仙道思想の中にその輪廓を沒してくるさまが窺はれる。[17]

六朝史學における個人に對する關心は先づ政治・社會から遠のく人々に注がれ、ついで全く實在性を缺く神仙者流の物語となつて現れ、こゝに史學の離れられない現實的立場が捨てられて杳冥なる假構の世界を敍するに至つた。魯迅が、六朝の人は幽明の世界の別なことは認めたが、鬼物も亦人と同樣に實在すると考へたと敍べてゐ

るが、[18] かゝる隱逸神仙の物語の裡に藏せられる著しき現實の臭味を感得するのは難いことではない。

第二に俗的に貴顯なる地位にある個人及びその屬する家門に對する關心がつよいこと。これは第一の場合と個人に對する關心といふ點では同じであるが、これは耆舊傳や某々別傳の形で著されるものについていふ。そしてこの場合の關心はむしろ個人の屬する家族に向けられてゐるので、家傳や譜系の類が盛んに作られた事情は當時の門閥崇尚の風潮と伴ふものであることといふ迄もない。正史の列傳でもその人物が占めた官位を麗々と揭げ、その家族生活に注意を拂つてゐるのも國政よりは貴族の私的生活に對する關心の强さを示してゐる。世說新語・語林の如き貴族社會の逸話が編せられてゐるのも同樣の事情である。從つて日常の些細な事件をも蒐錄して繁蕪を厭はない風がこれに伴つてくる。この關心が淸談と關聯する所あること云ふ迄もない。しかして、梁代に盛んになつた沙門の傳記編述において、本來超俗的なことにおいて價値あるべき沙門の行事が反つて俗的な貴族との交際の叙述において示されてゐるのは注意に値ひする。

第三に珍怪・新奇を喜ぶ傾向である。これにはまづ地理書において遠方の異物や土俗の奇を傳へてゐることが擧げられ、[19] 次に搜神記のごとき神怪な物語が史家の手により編まれ、また正史の中にも五行の變、天文の戒めが國家政道に關することを說いてゐる。そしてこれら奇怪な說がそれ以外の現實的な記事と並んで價値ある事として揭げられてゐる。こゝに浮虛の弊が生ずる。更に人物の事蹟においても隱微を探り眞しやかな話柄を捉へてゐる場合がある。[20] 豐かな資料の自由なる搜訪、事象の微妙多彩への愛、個性の卓越、機智と諷諧に富む逸話のもてはやし、未知のものへの憧憬と探索、事物の神祕的連絡の主張、かゝる一聯の傾向は浪漫的とも總稱せられうる。史學の體例が整然と制定され、史論家の嚴格な批評がその上に加へられ、史家の價値が史觀よりも史體に於

て上下せられる形式尊重の正史中心の支那史學において六朝時代のそれは著しい反動を示す。六朝にも決して中斷したり衰微したりせず、相繼いで編纂された國史の形式に就いてのみ見ればその他の時代と格段の相違は考へられぬ。またこれら國史を史記・漢書と比べては史書として新味なく沿襲の跡のみ目立ち、その價値は及ばないといふ考へも誤りではない。しかし六朝の史書はまづ新しくできた史體の多樣性において看取される。多種なる形式の內に多樣なる上にも多樣な經驗界の諸事象を奔放なる筆致を以て細碎を嫌はず盛らうとする史學思潮は、それにも係らず支那史學史上に置き換へられない發展の契機をなしてゐる。卽ち古代以來正統視された史書の記事やその信憑性如何を疑つたり抹殺することは控へるが、ひろく異說新知識を求め傳統に拘束されない近代の史料を搜訪し、これを史書に編することは、ひいては、この新奇な資料についての批判討論を生ぜしめずにはおかぬ。儒敎の精神はこの時光りを失ひ、分裂せる社會紐帶の形式的維持、卽ち貴族の家門道德の禮法的規制と、空疎なる民族主義とにおいて生存を保ち、史學は經學的な範圍の中をその境界目指して飛翔しつゝ遂に幽玄神祕幻奇瑰麗な藝術的宗敎的雰圍氣に向つて上昇した。

しかもその民族主義的潮流は隋唐帝國の出現と共に新たなる政治史關係の史書を出でしめ、劉知幾に批判され斥けられた民俗學的資料はかへつて彼の古典批判の根據となり、新興史書の形態は正史の不備を補ふ隨筆類の先蹤となり、起居注等は實錄の基となつた。またこれと關聯して六朝の史籍と史學は政治・經濟・制度以外の文化現象への注意、個性・民族・家族及び宗族形態研究への指示、支那文化の複數的單一性の承認による地域的文化の人文地理的考察の必要を吾等に敎へ與へてゐる。

【註】

① 王儉（西紀四五二―四八九）南齊書卷二十三に傳あり。隋書經籍志によれば七志とは經典志（六藝小學史記雜傳）・諸子志（古今諸史）・文翰志（詩賦）・軍書志（兵書）・陰陽志（陰陽圖書）・術藝志（方技）・圖譜志（地域及圖書）であり、道佛等九條を附見としてゐる。

② 支那史學思想の發達（岩波講座東洋思潮第二册）。

③ 世說新語言語篇に「過江諸人每至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯中坐而歎曰、風景不殊。正自有山河之異。皆相視流淚。唯王丞相愀然變色曰、當共戮力王室、克復神州。何至作楚囚相對。」と。劉琨の詩は文選卷七にあり。「皇晉遘陽九。天下橫氛霧。」云々。

④ 劉知幾「史通」正史篇。

⑤ 本節及び後節の資料は劉汝霖「東晉南北朝學術編年」に負ふ所多し。

⑥ たとへば成・康の際に政治を執つた庾亮・冰・翼兄弟の場合のごとく、儒敎振興と中原回復と中央集權と老佛排斥とは步調を共にする。

⑦ 宋の文帝が四學を立て儒學その一にあり、また梁の武帝も儒學を振興したとはいへ、玄學や佛敎を竝立したので覇權はつひに經學にかへらなかつた。これは漢代と六朝とにおける儒學の地位機能の差異に歸する。

⑧ 後述。

⑨ 宋の孝武帝は英邁の器であつたにも係らず、朝臣を愚弄したり奢侈にふけつたといふ廉で非難され、廢帝子業が宗室の義恭を殺した殘酷さや宮廷の淫風については辯護されまいが、彼が在位の間國威を損する樣なことはなかつた。

⑩ 魏收に對する辯護は四庫全書總目提要が既に試みてゐる。また彼の書が當時の大臣陸操・楊愔に褒稱せられ、後者が魏書を評し「但論及び諸家の枝葉親咽繁碎をなすに過ぎ舊史と體例同じからざるを恨むのみ」と云つた言に徵すると、魏收が當時の貴族社會の記述に周密な用意を示したといふことが判る。ゆゑにその時代の褒貶に關せず、彼の時代を代表してゐるのである。

⑪ 南齊書卷五十二文學。檀超傳。

⑫ 晉書卷八十二　干寶傳。

⑬ 史通、書事篇。浦起龍は「非關軍國興亡者」と註してゐる。

⑭ 史通、直書篇。

⑮ 晉代の起居注は泰始・咸寧より義熙・元熙に至る迄たえまなく編まれ、斷片ながら現存するものもあり、隋書經籍志によればその卷帙も可成多い。漢の時、起居注は宮中女史の職であり、後漢獻帝及び晉以後は近侍の臣の錄する所といふが、惠帝起居注に趙王倫の亂の時、帝が衣類を侍臣から借りたといふ如き悲慘な話をのせてゐるに徵して、天子の私生活の詳細を錄したので、矢張天子個人の行爲が政治上の事件と倂しく注意せられてきた爲に起居注類の著述が盛んになつたものではなからうか。（六朝時代の史籍の目錄上の知見はいふまでもなく淸乾隆朝の人章宗源「隋書經籍志考證」に負ふ。）

⑯ これについては劉知幾の史通、ことに浮詞・品藻・直書・曲筆・書事・採撰の諸篇において鋭く論究せられてある。

⑰ 松村武雄博士は「神話傳說の支那」において、支那神話傳說の傾向を希臘の社會的、北歐の哲學的、印度の宗教的、日本の政治的と對照して仙術的といふべく、またその特性として1怪談的要素 2怪奇妖幻な色調の藝術化 3物語の人物時代明かで史實的形貌をとる 4道術神仙思想 を擧げ論ぜられたが、實にかゝる諸特性が强められたのは魏晉六朝の頃ではないかと私かに思ふのである。

⑱ 大魯迅全集六「中國小說史略」

⑲ この時代の地理書については靑山定雄學士「六朝時代に於ける地方誌編纂の沿革」（池內博士還曆記念論叢）を參照。氏は地誌編纂を通じて社會・文化の有樣を窺はんと試みられ、六朝時代には地誌は地理・文化・傳說に詳しく財賦・官衙・秩官の如き、宋元の地方誌に記せられる如き項目が略せられてゐると結論されてゐるが、また六朝史學の文化史的傾向が見られる。

⑳ 史通雜說篇（中）に、沈約の晉書が奇說を造るを喜び、元帝を牛金の子なりとし、牛が馬後を繼ぐの徵としてゐる妄を責めてゐる。（また採撰篇にも見ゆ）

## 附記

數年來、六朝の史籍に親しみその史料を涉獵してゐる中に、自分は六朝の史籍には表現の一般的傾向、若干の容易に看取されうる類型があることを感じた。私の關心を驅りたてる六朝文明の性質は邇くこれら史籍の性質の中に求められるかも知れぬ。六朝史學の反省は六朝の歷史的認識にとり缺くべからざる根本的反省ではないか。かういふ意味でこの拙文を草しようと思ひたつたわけである。

——昭和十五年九月廿八日稿了——